DOKU−GAKU勝手にチョイス!!

パラドックス１３

「世界が変われば善悪も変わる。
人殺しが善になることもある。これはそういうお話です」

運命の 13 秒。人々はどこへ消えたのか?
13 時 13 分、突如、想像を絶する過酷な世界が出現した。陥没する道路。炎を上げる車両。崩れ落ちるビルディング。破壊されていく東京に残されたのはわずか 13 人。なぜ彼らだけがここにいるのか。彼らを襲った“P-13 現象”とは何か。生き延びていくために、今、この世界の数学的矛盾(パラドックス)を読み解かなければならない!
張りめぐらされた壮大なトリック。論理と倫理の狭間でくり広げられる、究極の人間ドラマ。“奇跡”のラストまで 1 秒も目が離せない、東野圭吾エンターテインメントの最高傑作!
(「BOOK」データベースより)

TICA

初期の作品が好きだったので最近の湯川学のガリレオシリーズや「流星の絆」には苦言を呈していたが、他の人の本をたくさん読んでいるとなんだかんだ言っても東野圭吾は最後まで読ませる作家の一人だと思う。この前読んだ「納棺夫日記」は淡々としたつまらなさで感想も一言で終わってしまったが、「聖女の救済」などつっこみどころの多い東野圭吾作品はそれだけでも結構楽しめる。読むのが楽しみに出来る作家なのは確かだし、やっぱり私は東野圭吾ファンなのかもしれない。

「パラドックス13」は、誰が書いたかを知らずに読んでいたら最初の何ページかでは東野圭吾とは思わない。時間のずれが起こり、時間の狭間へ飛ばされてしまった13人。多元的宇宙だのタイムスリップだのが好きなので期待していたが、パニックものやサバイバルものといった感が強く、人間のありようが中心の物語。もとの世界に戻れないまま、様々な苦難に襲われ将来が見えないときに人は自暴自棄になるか、プライドを持ったままでいられるか。その選択のとき女性の方が凛々しく見えるのは作者が男性だからか。

あのとき、今とは違う選択をしたときの自分もまたどこかの空間で生活をしていると思うと選ばなかった自分の人生を見てみたくなる。そんなことを思った一冊でした。

以下、ネタバレになります。

1秒の狂いもなく死ぬのに飛び降りって選択は正しくないと思うし、理想の世界を作るためにアダムとイブになるというのも唐突な感じがした。その提案をした兄のそれまでの慎重な性格を思うと、あの場では言わない気がする。いくら流れとはいえ、なにもあそこでそんな話をするこたないでしょーと驚いてしまった。また、主役の兄弟が現実に置いてきた親の話を一言もしない不自然さは、義兄弟という説明だけじゃ納得出来ない。

最後に飛んで戻った現実も、多元的空間が増えただけで時間の狭間で苦しんでいた人たちはどこ

へ行ってしまったのかはわからないまま。売れっ子の現代作家のタイムスリップの結末はもっとちゃんと結果を出してほしかった。

健（前回読書リストより転載）

一種のタイムスリップものだが内容は地震パニックものであり、サバイバルものと言った方が適切。ネタばれになるので詳しくは書かないが宇宙的に起きた 13 秒の時間のずれに取り残されたわずかな人々のサバイバルを通してそれぞれの人生・生き方を交え災害時のシミュレーションを行ったとも取れる作品。タネになる部分ラストに新味が無くたいしたことのない割には読ませるところはさすが。

うさお

時空ものだな。読んでたら「漂流教室」を思い浮かべてしまった。楳図かずおの方がストーリーは面白い。ヤクザ者が出てきたときに、このストーリーがどう進んでいくか判ってしまった。図書館に行くとこの作家の名前を探してしまう。私は好きな作家のひとりなのだが、これはあまりいただけないな。

「ガリレオ」が異常に売れているそうなので一度読んでみたい。「鳥人計画」の頃から読んでいる作家だが、まあ、「鳥人計画」のプロットもそう大したことは無かったけど、読ませ処は持っていた作家だった。「パラドックス13」は少し疲れの見える作品のようだ。

Cacco

なんてゆーか、ちょっとした思い付きだけで長編小説書くなよ！と言いたい。13秒世界がずれちゃったらどーなるかな～ちょっと書いてみちゃおうかな～程度の本にしかわたしには思えない。

なぜ、世界がこういう状況に陥らなければならなくなったかの説明もない。こんな説明はできないものであったとしても無責任な本だな～と思ってしまうのは、その後のサバイバルの描き方がつまらないからじゃないかな。世界の一大事を知っていた各国のトップの対応ってのも納得いかない。登場人物も魅力的でない。たぶん警察官兄弟が主役なんだろうけど、うーーん、よろしくないな、と。

気がついたら見知らぬ世界で生きることになっていたという筋立てなら楳図かずおさんの漫画「漂流教室」のほうが 1000 倍は面白い。学校ごと異次元にふっとぶお話なんだけど、親子愛という強いテーマを軸に、異世界で生き抜こうとする小学生たちのサバイバルは読みごたえがあって、しかも泣けた。初期の東野圭吾作品（「魔球」「鳥人計画」）は複雑なストーリーはなく青春ミステリーの味わいで案外好きだった記憶があるけれど、広末涼子で映画化された「秘密」を読んだ時にはあまりのつまらなさにびっくりして、それ以来東野作品は読まないことにしたんですよね(-“-)1999 年度作品、「白夜行」は面白かったけれど、天童荒太さんの「永遠の仔」とかぶる印象なのが減点対象ですね～（この2冊は同じ年の発行。「白夜行」が半年遅れ。この年は暗い作品が流行したんですかね～）

次号DOKU－GAKUチョイスは村上春樹**「1Q84」**です。
話題のベストセラー、DOKU－GAKUで取り上げないわけにはいかない！！
ハルキストのあなたも、ハルキストでないあなたも、
ぜひ参加して心行くまで語り合いましょう！！